



2007年1月発行

我を救わん者は誰ぞ

「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。」

(ローマの信徒への手紙 7章 24~25節)

回心前のパウロは、大いなる自信家でした。罪の自覚などさらさらありませんでした。過去を顧みて、彼はこう述懐しています。「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした」(フィリピ3:5、6)と。彼は、ユダヤ教に行き詰まったから、或は、挫折を経験したので、キリスト教に転向したのではないのです。彼が、自分の罪に目を開かれたのは、復活のキリストに出会ったからであって、その意識は、年を重ねるごとに深まり、最後には、「わたしは、その罪人の中でも最たる者です」(1テモテ1:15)、とまで言うに至るのです。従って、上掲の「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」、と言う深刻な罪の自覚と、それ故の呻きは、キリスト者としての呻きであって、過去を述懐して述べたものではないのです。

パウロは此処で、嘘偽りなく、自分の心の内をさらけ出し、惨めな自分の救いを叫び求めているのですが、彼が、そこまで自分をさらけ出せるのは、実は、既に彼がキリストの救いに与っているからなのです。人は誰も、キリストに出会うまでは、正しく自分の罪を知ること、認めることも出来ません。だから、人が自分の罪を知り、それを認める時には、既に救われているのであって、「我は罪人なり」、と言う、この自己認識こそは、キリスト者の何よりの印となるのです。ですから、

パウロの此処での叫びは、無残な敗北の結果、思わず発せられる悲しみや、絶望の叫びではなく、むしろ凱歌であり、勝どきなのです。だからこそ、こう叫んだ後、一転して今度は、「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」、と、神への感謝を述べる事が出来るのです。

“感謝”の原語は“カリス”で、普通は“恵み”と訳されます。同じ言葉が、神から人間へ向けられる時には、“恵み”となり、人間から神に向けられる時には、“感謝”となるのです。神と人間との正しい間柄に於いては、“カリス”のキャッチボールが起こり、神は人間に恵みを与え、人間は恵みに応えて感謝を捧げるのです。恵みがあればこそ、感謝が生まれるのであって、パウロが此処で、ごく自然に感謝を述べるのは、既に身に染みて、彼が神の恵みを味わっているからなのです。

しかし最後に、「このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです」、と、折角の感謝を台無しにしてしまうような言葉が語られます。がそれは、先の言葉の単なる蒸し返しではないのです。この言葉の調子は、これまでと全く異なり、何処までも静かで、飽く迄も落ち着いています。この静けさと落ち着きは、一体何処から来るのでしょうか。それは、パウロが、罪深い自分から目を転じ、ただキリストにのみ、その目を向けたからです。

キリストは、何処まで行っても、罪を犯さずには生き得ない私たちを、赦し、又生かし、期待しつつ、待ち、どんなに時間がかかろうと、遂には、「御自身の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」(フィリピ3:21)。このキリストの恵みを知れば、パウロならずとも、自ずと感謝が生まれ、罪の自分をも、あるがままに受け入れて、しかも聖霊に期待しつつ、一足又一足と、前進出来るのではないのでしょうか。私たちが倣うべきは、パウロその人ではなく、パウロが目を自分からキリストに転じた、正に、そのことなのです。

牧師 三輪恭嗣

(2006年11月19日の礼拝説教より)